

経験から学んだこと 第1回 山の中のホームでも人気があった理由

2016. 10. 1

■今なら無理か??

房総半島の中央部、K市に『F・M』という大規模な有料老人ホームがあります。一般居室291、介護居室88の合計379室、定員480名という規模です。

1975年（昭和50年）の6月開設ですから、もう40年を超す“老舗”です。Fという会社が経営していますが、2006年（平成18年）には東京にも全32室の有料老人ホームを開設しています。同じ場所で1970年（昭和45年）から特別養護老人ホーム（特養）を運営する社会福祉法人の関連企業で、病院と老人保健施設（老健）もあり、今地図で狭い範囲を眺める限りはそこに有料老人ホームがあってもおかしくはないというロケーションです。

ところが、ここはどういう所かという、正に房総半島のまん真ん中で、JRの非電化単線（ディーゼルカー）で約1時間のKMという駅から更に1,300メートルの登りで徒歩約20分という所です。房総半島は今でこそアクアラインが出来、便利にはなりましたが、話しは40年も前ですから、如何に人気の有った※N社が熱海に有料老人ホームを運営していたように、有料老人ホームはリゾートにあるもの、という時代でも、少しどころか全く目茶な計画という印象でした。

しかしながら、この有料老人ホームが人気がありまして、開設後そう時間が経たないうちにほぼ満室状態になり、暫くそういう状態が続いていました。「環境」という点で評価すれば「自然環境」は満点です。入居時自立タイプですから、自然が大好きな方、自然と共に生きていこうと考える方には満点であったでしょう。では、それだけかと言うと、実は、この不便なロケーションがいいからという方が予想外に多かったそうです。少し信じられないのですが、不便さがいいのだ、ということです。不便だと何故いいのか？それは、家族がなかなか来られないからだそうです。そして、そうだから滅多に家族が訪ねて来なくとも、「こんなに不便なのだから年一回くらいが限度よね」と諦めがつくのだそうです。家族は「あんなに不便な所には滅多に行けない」、親は「不便だから来なくて当然」という訳です。

このような家族関係を寂しい関係と思う向きも多いと思います。しかしながら、家族の関係とはそう単純明快なものばかりではありません。子供は独立し、新たな家庭を持ちます。そこには、新しい家族（嫁や婿）が入ってきます。親が有料老人ホームに入居したいと言います。⇒入居時自立タイプが主であった当時は、自らが入居を決めることが殆ど。子供たちは戸惑います。やれ世間体が悪いとか、何で入居しなくてはならないの、何か不満でもあるのですか？はたまた、財産が無くなるのではないか、と。

そんな家族の意見や思惑を乗り越えて親は入居します。

長い目で見れば、それが正解なのでしょうが、世間体などという訳の分からないものを気にして、家族は反対するし、本人は反対されることを気にするのですね。でも、大概はホームのサービスに満足し、モヤモヤも直ぐに解消します。ただ、その後、入居したホームが近ければ近いで、家族は頻繁に通わなくてはならないと感ずる煩わしさが有り、親は、“近くに居ながらどうして来てくれないのだろう？”とヤキモキするという訳です。それなら、いっそ、うんと離れた不便な所のほうが互いに諦めが付く・・・という訳です。

現在、『F・M』にお住いの方々は相当高齢化し、要介護の方も増えていますので、その変化に応じた対応をされていることと思います。

入居時自立型の有料老人ホームの経営のポイントは、当初は全員自立でも、時を経るにつれ要介護の方の割合が増えると見込まれますので、それに伴ってハードとソフトサービスの内容を柔軟に変えていくことだと思えます。

以 上

Y O 生

※「N社」：分譲型高齢者マンションの老舗で、熱海を中心に2,000室ほどを運営。分譲の場合は有料老人ホームの3類型（介護付き・住宅型・健康型）にはあたらない。